梅花女子大学教職研究 No.1（March 2017）：21-31

小学校入門期の国語科の授業づくり
――第１学年の実践事例から――

Designing Activities for Beginner Japanese Language Classes in Primary schools

﨑野 温代　　菅本 大二
SAKINO Atsuyo　　SUGAMOTO Hirotsugu

はじめに

滋賀県教育委員会は，本県の子どもたちの学ぶ姿に、学習の基本となる学びの姿勢や態度が身についていないなど課題があるとして、[学ぶ力向上　滋賀プラン] を示し、「生活の中で学ぶ力をつける」こと、「繰り返し努力したことを認め能力や可能性を引き出す」ことが大切とし、特に小学校低学年において、主体的に学ぶ姿勢、学び方、学習規範など「学びの基礎」を身につけさせることを目的とした「学びの基礎体験型学習プロジェクト」を実施することとした。

そして、幼児教育からの接続期にある低学年の児童の指導のポイントについて「学びの基礎指導の手引き」（平成２７年４月）を提示した。

その中で、「学びの基礎」の３つの要素を

① 主体的に学ぶ姿勢：子どもが知的好奇心をもって意欲的に学習する能力や態度、学ぶことの楽しさや成就感を体得すること。

② 学び方：具体的な活動や体験を通して学んだり、試行錯誤を繰り返しやってみたりしながら、問題解決的に学んでいくこと。

③ 学習規範：学習規律の他に学習用具の使い方や読んだり書いたり聞いたり話したりすること。

とし、低学年における学びの基礎の定着が、学習習慣を身に着けさせ、課題の発見と解決に向けての主体的・協同的に学ぶ学習（アクティブ・ラーニング）につながり、中学年以降の探究的な学習へ発展するとしている。

また、文部科学省は、小学校において教科学習に着実に向かうために、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿として、

① 健康な心と体、②自立心、③協同性、④道徳性・規範意識の芽生え、④社会生活
との関わり、⑥思考力の芽生え、⑦自然との関わり・生命尊重、⑧数量･図形、文字等への関心・感覚、⑨言葉による伝え合い、⑩豊かな感性と表現、
を挙げ、幼児教育との連携や接続を意識したスタートリキュラムを、生活科を核としながら、教育課程全体を教科横断的、関連的にカリキュラム・マネジメントの視点から検討するとしている。

４月に入学し、緊張しながらも、不安を抱きながらも、保育園や幼稚園とは異なる「勉強すること」に対する大きな期待を持つ子どもたちが、意欲を持って楽しく学習に参加し、バランスが取れた確かな学力を身に付けるための授業づくりを目指さねばならない。

そのために、「話す・聞く・読む・書く」という言語に関する力を習得することが重要である。

本校においても、主題を「学びの魅力を追い続ける子ども」として国語科を窓口にした研究を推進し、子どもが確かな言語能力、読解力、表現力等を身に付けるとともに、学びの楽しさを知り、主体的に学びに挑もうとする子どもの育成に取り組んでいる。

その研究を推し進めるほどに、小学校入門期の指導のあり方、入門期に習得した学びの力を発達段階に応じて系統立て、生きて働く力として定着させるかが課題となっていることに気づく。幼児期から学童期そして、青年期にさしかかるまでの６年間というめざましい成長期において、めざす子どもの姿、育てたい子ども像を明確に、指導の重点を共通理解して、指導できる教員の資質や授業力の向上に取り組むことが、学校現場の喫緊の課題である。

本稿では、国語科における授業づくりについて、学びの基礎づくりとなる１年生の実践をもとに考えたい

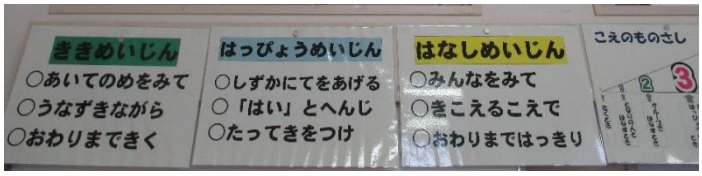
1．教科学習に臨むための基盤を確立する

(1) 聞く力を育てる

現在、子どもの実態から「聞く力」の弱さが見て取れる。

ただ「聞きなさい。」という指示では、わずかな時間は我慢できても、４５分という単位時間を学習に集中させることは難しい。保育園や幼稚園での緩やかな時間の流れの中で、遊びを柱に、全身を使って自分のやりたいことや興味関心のあることに没頭するのなら、むしろ時間が足りないことを訴えたりもするが、当然、教科学習が始まる学校教育の場ではそればかりとはいかない。

１年生なりに「なぜ話を聞かなくてはいけないのか。」が理解できるよう、大事なことほど１度しか話さないルールを徹底したり、時には聞かなかったことで支障が生じる経験を重ね、聞いておいてよかったということを実感したりするなど、様々な「聞く場づくり」を行う。この時期の子どもにとって、「聞き名人」などのネーミングも関心をそそるであろうし、聞きたくなる話し方や提示の方法を工夫することも効果的である。また、絵本の読み聞かせやお話の語りなどを重ねることで、子どもたちに少しずつよい姿勢で、長い時間でも話を聞こうとする態度が備わり、学習内容の理解にも効果が表れる。



(2) 教師が言語活動のモデルとなる

正しい日本語の習得は、日々の対話や会話から始まる。「先生、○○。」など主述の整わないやりとりや、「○○してもいい？」など場所や相手意識のない口語体での会話が、高学年になっても数多く見られ、そのまま曖昧にしてしまうと、改善に時間を要する。

まずは、子どもの前に立つ教師自身が正しく、場や相手、目的に応じた適切な言葉や文章で話すことが言語活動のスタートである。子どもを呼ぶときには男女関わらず「○○さん」と呼ぶこと、「～です。」「～ます。」「～しました。」など敬体で話すことなどを常に実践し、子どもたちにも言い直しをさせるなど、例外を認めない徹底した指導も必要である。

(3) 行動にけじめをつける

使うもの、使わないものを明確にし、「～しながら○○する」ことを極力さける。

子どもは動いているときに指示や注意をしても、その内容を受け止め行動に移すことは難しい。また、不必要なものが目に入ったり、手で触れることができたりする場の設定も集中力を欠けさせる要因である。子どもの動きを一旦止めて次の指示をする、教科書や筆箱など学習に必要なものを必要なときに出し入れするなどが定着すると、子どもの動きや取りかかりが素早くなり、授業にも生活にもメリハリが生まれる。

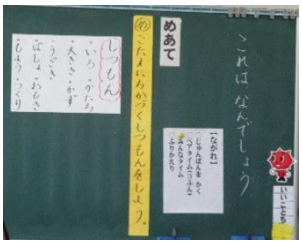
(4) 端的かつ明快に指示する

一度に複数の事柄を並べたり、くどくどと説明を繰り返したりするよりも、手短かに、かつ簡潔に指示をすることが必要である。特に、視覚優位の子どもにとっては、接続詞を使って、何文も続けて伝えようとしても、その殆どは理解することができないまま、行動に移せなかったり、違うことをしてしまったりして注意され、意欲をなくす結果につながることが多い。明快な指示は学習や活動意欲に直結しており、課題をしっかりと捉えて授業に向かう姿にも直結している。

小学校現場では、高学年を担任することが続くと、速いテンポで長い文章を一気に話すことになりがちだが、明らかに、１年生段階の子どもの表情や反応に不安感や戸惑いが現れる。ゆっくりとわかりやすい話し方を心がけたい。

(5)「見える化」する板書を工夫する

授業のＩＣＴ化が進む中でも、従来の板書の活用は重要であり、学習内容の習得にも大きな影響を及ぼす。図や絵、記号などを交えながら、わかりやすく、はっきりと示すこと、マークや下線などをうまく用いて焦点化することで、授業の流れや本時のポイントを確かめ、振り返ることになる。



色チョークも使い分けも心がけたい。

また、授業のはじめに、本時間の流れを視覚化することで、子ども自身が見通しを持って学習に参加する姿にもつながる。

一方、有効なＩＣＴ機器との併用にも取り組みたい。タブレットや書画カメラなど子どもが活動する姿や書き込んだノートをタイムリーに映像化することは興味関心を引き、授業を活性化することにつながる。授業後に板書をカメラで撮り、次時に提示しながら前時の学習を振り返ることも、子どもが学習の流れを認識するに有効な活用であろう。

どちらかがよいかではなく、ここでもバランスが重要になる。

(6) 双方向の学びを習得する。

自分の言いたいことを話せば終わりになりやすい幼児期から、話し手と聞き手の存在があることに気づき、双方向の言葉のキャッチボールの体験の楽しさや価値を感じる場を重ねる。特に、低学年では２人組（ペア学習）での交流がよい。

まず、話し手は相手の様子を見ながら話す。聞き手は「ちゃんと聞いているよ。」ということが伝わるように、うなずきながら聞くことを徹底する。相手が聞いてくれているという実感は、話し手の安心感や自信につながり、話そうと意欲を高める。

さらに、聞き手が質問をしたり、感想を話したりする場を作り、少しずるそのやりとりを増やしていくことで、より集中して聞き取り、声の大きさや話す速度などに気をつけて話そうとする姿につながる。

こうした経験の積み上げが、中高学年での少人数で協同的に課題追求しようとする態度につながる。

(7) 声に出して読むことを重ねる。

教科書の教材本文を何度も繰り返し読む。学年が進むほどに、目で追いながら読む（黙読）ことにも慣れていくよう進めるが、１年生段階では、とにかく声に出して読ませることが必要である。殆どの子どもがあっという間に覚えてしまい、得意げに暗唱をしはじめたりもする。まだ、１文字ずつを追わないと読めない、行を飛ばしてしまうなど、個人差も大きい。指でなぞったり、定規を当てたり、時には一文だけが目に入るよう他の文章を隠したりしながらも声に出して読むうちに、その成果ははっきりと現れ、学習への意欲につながる。

自分自身が書いたものもできる限り声に出して読ませる。文字と音声を一致することは言語取得の一歩でもある。特に、促音や拗音、長音の習得に高学年になっても抵抗感を示す子どもが多い。本校では、入門期の段階で多層指導モデル MIM（ミム）を取り入れ、全員対象に毎日時間を設けているが、同時に、書いたものを声に出して読むことが、今後推敲する習慣づけにもつながると考える。

(8) 学びに向かう姿を褒める。

できたかできないか、正しいか間違っているか、教師のねらいに沿っているかそうでないかなど成果の評価だけではなく、課題に向かってどのような姿勢で取り組んでいるかを見逃さず、適切に子どもに返すことを忘れてはならない。

背筋を伸ばし姿勢良く座っている、身を乗り出して話を聞こうとする、最後まで諦めずに考えようとしている時など、機を逃さずに全員の前で紹介し、大いに賞賛する。教師の見取りの規準を日常的に示すことで、子どもたちはどうあればいいのかが明確になり、刻々と変化する。学びに向かう姿のよりよい例をできる限り多く知ることが、今後の主体性や能動的な学びの基礎となる。

2. 授業実践「じどう車くらべ」（光村図書）から

次に、これらの取り組みが、国語科における授業力においてどのように具現化されたかについて、伊吹亮太教諭（大津市立仰木の里小学校）の１年生１２月の説明文の授業実践から検証する。

(1) この単元について

じどう車くらべ

いろいろなじどう車が、どうろをはしっています。
それぞれじどう車は、どんなしごとをしていますか。
そのために、どんなつくりになっていますか。

バスやじょうよう車は、人をのせてはこぶしごとをしています。
そのために、ざせきのところが、ひろくつくってあります。
そとのけしきがよくみえるように、大きなまどがたくさんあります。

トラックは、にもつをはこぶしごとをしています。
そのために、うんてんせきのほかは、ひろいにだいになっています。
おもいにもつをのせるトラックには、タイヤがたくさんついています。

クレーン車は、おもいものをつりあげるしごとをしています。
そのために、じょうぶなうでが、のびたりうごしたりするように、つくってあります。
車たいがかたむかないように、しっかりしたあしが、ついています。

はしご車は、かじのときにはたらくじどう車です。
どんなしごとをしていますか。
そのために、どんなつくりになっていますか。

ほかにどんなじどう車がありますか。
１つえらんで、かきましょう。

１年生における説明的な文章の解釈に関する指導事項は、現行学習指導要領に「時間的な順序や事柄の順序などを考えながら内容の大体を読むこと」とある。これは２年生において同様である。

説明文の学習は、１学期の「くちばし」という教材で、さまざまな鳥のくちばしについて特徴を記した文章を正確に読み取り、問題提起から、「問い」に対する「答え」があり、まとめがあるという典型的な説明文の型を学んだ後、本教材は２度目に出会う説明文となる。

① 教材観

本教材で扱われる対象は、子どもたちの身近にあり、興味関心を引きやすい自動車であり、取り上げられている自動車の種類は、幼児期から絵本やおもちゃ、実生活でも比較的目に触れやすいものであり、イメージしやすい。

第１段落で「どんな仕事」「どんなつくり」の２つの事柄が「そのために」でつながれて問われ、第２．３．４段落は、その各々の問いに対し、同じく「そのために」をつなぎにして端的に答えるという説明文特有の構成である。３回の反復により、使い道とそれに即したつくりであることが明確になっている。

そして、第５段落で、はしご車を挙げて、読み手に「どんなしごと」「どんなつくり」と問いかけ、さらに第６段落では、読み手である子どもたち自身が自動車を選び、これまでの例にならって文を作

ってみようというクイズ的な構成となっており、子どもたちの興味を高め、学習意欲を喚起する、１年生という発達段階に応じた巧みな構成である。

現行の学習指導要領解説国語編では、第３章第１節に、第１学年及び第２学年の〔Ｃ読むこと〕の目標が、「書かれている事柄の順序や場面の様子などに気づきながら書くことが出来るようにする。」と記されている。

本教材では、説明文の構造を理解するため、事柄の順序、規則性に気づき、正しく読み取る指導が求められ、さらには、〔Ｂ書くこと〕には「順序がわかるように、語や文の続き方に注目して文や文章を書くことができるようにする。」とある。

これに従い、第５、６段落で、提示されたはしご車の仕事やつくりについて、前段落を参考にして、「そのために」というつなぎを用いて適切に書く指導を行い、さら例示された自動車以外から自分が選択し、その仕事とつくりを端的に文章に書き表す段階にまで、書く力を高めなければならない。

子どもが知的好奇心をもって意欲的に学習を進め、学ぶことの楽しさや成就感を体得できる学習計画が必要である。

② 児童の実態

さて、本学級の子どもたちの国語科における実態を見ると、やはり、入学時において、本人の持つ特性や能力、幼児期の言語環境、先行経験など多様な状況が見られた。

１２月の段階でも、全員で声をそろえて行う音読に合わせることが難しく内容の理解に至らない子どもから、一読してほぼ内容を理解し、全文を覚えて諳んじることができる子どももいる。話すことについても、問われたことを理解するのに支援を要し、思いを表出しにくい子どもから、既に自分の思いを自由に文章に書いたり、話したりできる子どももいる。

本学級の児童は、４月以降、「～です。」「～だと思います。」「〇〇さんといっしょで、～です。」という定型文で発言することや、場と目的に応じた話す声の大きさを表す声のものさしを考えることに取り組み、ほぼ意識付けは定着している。

同時に、物語文の学習を通して、登場人物の気持ちを考え、登場人物になりきって音読するという経験を重ね、大方の子どもは、声の大きさやスピードに抑揚をつけて読んだり、登場人物によって声の変化をつけるなど工夫して音読したりできるようになりつつある。

国語科のペア学習では、これまで「一つの課題に対して一緒に考えて答えを導く」というやりとりよりも、「相手の読みを聞き、自分の考えを伝える」ということを主として取り組んできた。今回は、個の考えを核としながらも「ペア（２人組）」での学習活動を多く取り入れながら、学級全体として考え合う経験を積み重ねることに取り組む。

また、タブレット機器を用いて、集中して話を聞こうとしている子どもの写真をその場で提示し、「おへそを向けて聞けているね。」「背筋を伸ばしていい姿勢で聞けているね。」など模範となる姿をタイムリーに視覚化することで、どのような聞き方がよいのかを子ども自身が確認できるように工夫することも重ねてきた。この時期の子どもは、よいモデルを具体的に示すことで、自分も認めてもらおうとする傾向が強いため、少しずつ成果が現れている。

③ 単元の目標（つけたい力）

・事柄の順序を考えながら内容の大体を読み、文章中の大事な言葉や文を書き抜くことができる。
・事柄の順序に沿って簡単な構成を考え、句読点を使ってつながりのある文を書くことができる。

④ つけたい力に向かう、子ども同士が深め合うための教師の支援

(ｱ)「話したい・聞きたい」を引き出す学習活動

それぞれの自動車の「しごと」と「つくり」を読み取る力が求められる。そこで、教師が「しごと」と「つくり」を書き表した文をヒントにして乗り物の名前を考える「のりものクイズ」を教材文に出会う前の導入段階に取り入れる。クイズ形式にして、ヒントからさまざまな乗り物を想像して答える活動は、子どもの「話す」「聞く」活動に必然性が生じ、顕著に「よくよく話そう」「しっかり聞こう」という姿として表れると期待する。

また、ヒントの出し方によってクイズが答えやすくなったり、難しくなったりすることで、答えを

引き出すヒントはどうすればできるのか、創意工夫する態度につなげたい。

(ｲ) ワークシートの工夫

導入のクイズ大会の段階から、ヒントの要素を「しごと」と「つくり」に着目し、それぞれを１文にしてカードに書き込んでいく活動を取り入れ、本文の読み取りの視点につなげるようにする。そして、『そのために』というつなぎ言葉を書いたカードで２枚のヒントカードを並べ、最後に「この自動車は何でしょう。」と定型文を組み合わせて出題させる。
視覚的なカードと文型をパターン化することでどの子も安心して取り組めるようにする。

(ｳ) 挿し絵の活用

自動車ごとに、「しごと」「つくり」を説明する文とその挿し絵を対比させながら、視覚で表現を理解させる。まあ、はしご車の文作りの前に、「はしご車のつくりをしらべよう」として、教科書の挿し絵を印刷し､そこに自由に知っているつくりやおうちの人に聞いたつくりを書き込む活動を設定する。

(ｴ) 家庭との連携

子どもたちの知識はまだ浅く、「しごと」や「つくり」の概念を捉えにくく、それをどう表現したりすればいいのか、わからないことが起こりうる。そこで、家庭に学習計画を伝え、子どもたちがどう書いてよいかわからないところを質問し､聞いてくることができるようにする｡分からないときには、自分でＳＯＳを出し、尋ね、解決しようとする姿勢は、今後の学習においても必ず必要となる力である。そのためにも、平素から家庭への啓発や連絡は重要である。

(ｵ) 繰り返しの音読と視写

授業中、家庭学習、学習の合間の時間等を使って、繰り返し音読する機会を保障する。この時期の子どもたちは、声に出して読むことが重要である。読み重ねる内に、自然と覚え込み、キーワードとなる言葉への気づきも生まれると期待する。

加えて、クイズづくりという好奇心を生かしつつも、本文を適切に、正しく書き写すことで、言葉の意味や句読点の付け方等に気づくことで、言葉への感性を高めるという国語科の教科の本質を見失わないようにする。

(ｶ) ペア学習の場づくり

学習の基盤は個人である。従って、子どもたちは様々な手がかりをもとに一人学びを進める力を身に付けさせなければならない。

しかし、その個の学びを広げたり、深めたり、視点を変えたり、新たなことに気づいたりさせるのは他者との交流である。１年生の段階で２人組での学習を繰り返すことで、高学年でのグループでの探究的な学びにつながる。

また、学びの進む子にとっては、他者に自分の考えを説明することで確かなものになり、自分の考えを持ちきれない子にとっては、尋ねたり、真似たりすることで学び方を身に付ける機会ともなる。どちらにしても、この段階で、わからないときには臆せず「わからない」が言え、それを受け止めた子どもが進んで関わろうとする学びのスタイルを育てることが重要である。このやりとりができないことには、学び合いは成立し得ない。

そこで、１年生のペア学習のモデルを提示し、浸透させる。

・２人で１つのことを相談する。（話す・聞く）→１枚のワークシートは２人の中央に。
・相手を見て話し合う。（話す・聞く）→話し手は相手を見て、聞き手はうなずきながら。
・自分が知っていることを伝える。（話す）→相手のためになること。
・教えてもらったことをためる。（書く）→自分の考えと比べながら。
・互いに感想を伝える。（話す・聞く）→うれしかったこと。ためになったこと。

・「わからない」と言われたら喜んで教えてあげる。

(ｷ) 学習の流れの提示

子どもが安心して、４５分間の学習に集中して取り組めるよう、学習の流れを授業開始時に提示する。この時期の子どもにとって、同じパターンの授業の流れを重ねることで、見通しを持って学習に臨み、次にやることに自主的に取り組むことができる。

(2) 単元計画（全９時間）

第１次　学習課題をつかむ（１時間）

◆学習の見通しを持つ。

・乗り物クイズを解く。

（第１問）救急車

（しごと）けがや病気の人を運ぶ仕事をしています。

そのために

（つくり）寝たまま運べるよう後ろが広く作ってあり、サイレンがついています。

（第２問）タクシー

（しごと）人を行きたい場所まで運ぶ仕事をしています。

そのために

（つくり）自動でドアが開き、運賃がわかる機械がついています。

（第３問）ベビーカー

（しごと）赤ちゃんを乗せることができて、お母さんを助ける仕事とをしています。

そのために

（つくり）お母さんが押すところと、赤ちゃんが寝たり、座ったりできるいすがついています。

・自分が知っている乗り物を発表し合う。

・教材文「じどう車くらべ」を読む。

・教材文の大方をつかむ。

出てきた自動車を見つけ、挿し絵で確認する。

・学習活動の見通しを持つ。

第２次　教材文「じどう車くらべ」を読み取る。（４時間）

◆バス・乗用車の「しごと」と「つくり」を確かめる。

・教材文の題名を板書し、「くらべ」の意味を考える。

・自動車の「しごと」と「つくり」を比べることを確かめる。

・バス・自動車の「しごと」と「つくり」を本文から見つけ出し、カードに書き写す。

・「そのために」というつなぎの言葉の役割に気づく。

・定型文に当てはめて、自動車・バスについてまとめる。

◆トラックの「しごと」と「つくり」を確かめる。

・上記と同じ

◆クレーン車の「しごと」と「つくり」を確かめる。

・上記と同じ

◆はしご車の「しごと」と「つくり」を考え、文を作る。

・これまでの学習をもとに、はしご車の「しごと」を考え、交流し、自分の考えを持つ。

・挿し絵を活用したワークシートに、はしご車の「つくり」を書き込み、ペアで交流する。
・考えた「つくり」の文から、必要なものを選び、「そのために」を使って文を作る。
・全体で交流する。

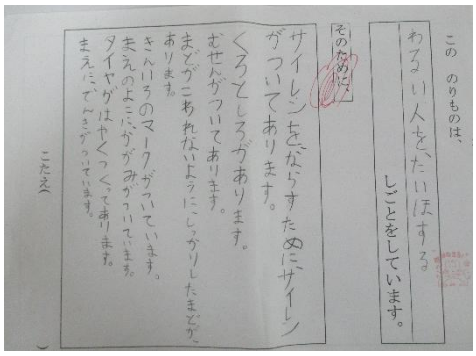
第３次　自動車クイズ大会をする。（４時間）

◆クイズを作りたい自動車を決め、教材文に習って、それぞれの「しごと」を説明す　る文を考える。
・選んだ自動車の「しごと」を考え、ワークシートに書く。（一人学習）
・ペアの友だちに伝え、アドバイスをもらう。（ペア学習）
・よりよい文に書き換える。（一人学習）

◆それぞれの自動車の仕事をするための「つくり」を説明する文を考える。
・前時と同様

◆出題の仕方を練習する。
・考えた「しごと」と「つくり」の文を、「そのために」のつなぎ言葉を使って組み立てる。（一人学習）
・ペアで自分のクイズを出し合い、アドバイスする。（ペア学習）
・よりよい文に書き換えたり、書き足したりする。（一人学習）
・聞いている人がよくわかるクイズの出し方を練習する。（一人学習⟷ ペア学習）

◆クイズ大会をする。



【子どもが作ったクイズ例】

Ａけがや病気の人を病院につれていくしごとをしています。
そのために、運転席の後ろは病院のようになっています。
ストレッチャーはレバーを握れば上下に上げ下げできたり、異動でき　たりできます。
サイレンを鳴らして、けがや病気の人がいることを教えます。
人が座る場所があります。
脈をはかる装置があります。
手当てをする道具があります。　　答え（救急車）

Ｂ泥棒をつかまえる仕事をしています。
そのために、サイレンを鳴らすようにサイレンがついています。
色は、白と黒です。白が上で、黒が下です。
金色のマークがついています。　　答え（パトカー）

Ｃ田んぼを耕したり、肥料をまいたりする仕事をしています。
そのために、タイヤが４つで、前と後ろの大きさが違って、後ろの方が大きいです。
後ろには平らにする機械が付いています。
一人しか乗れません。
ナンバープレートがありません。
ブレーキが２つあって、ペダルが１つです。
窓の上にランプが付いています。　　答え（トラクター）

Ｄ火事の時に火を消すしごとをしています。
そのために、火事の時に早く着くためにサイレンがついています。
ホースをのせるところがついています。
屋根に赤いランプが付いています。

連絡が取れるように無線がついています。
はしごが上についています。
運転席にいくために階段が付いています。
後ろに荷物をのせるところがあります。　　答え（消防車）

(3) 本実践の成果

本授業実践を通して、得られた成果は以下の通りである。

○聞く力が身についていることで、迷わず課題に向かうことができた。

４月以降の徹底した聞く姿勢や態度の指導を行ったことで、教室全体が学びの環境となり、教師の指示がよく理解され、学習のテンポがよくなった。快適なテンポで学習を進めることは大変重要で、待ち時間が長くなったり、何度も同じ指示を繰り返したりすることが私語や手遊びが生じる原因にもなる。

机上に不要なものは置かず、その都度取り出したり、片付けたりする動作も素早くなり、結果的に学習に取り組む時間の保障にもつながる。

子どもたちがストレスなく学習活動に没頭するためにも、教師は４５分間といく授業時間を如何に効率よく組み立てなければならないが、それぞれの配分のそのバランスがよく、気持ちよく学習に取り組むことができた。

○友だちと学ぶことの楽しさや良さに気づくことができた。

ペア学習を通して、「友だちに（考えを）プレゼントできてうれしかった。」「(考えを）プレゼントしてもらって賢くなった。文がよくなった。」という声が聞かれた。一人学習とペア学習を繰り返すことで、ペアで学習することの意味や価値を子どもたちが理解することにつながった。また、二人が向かい合うのではなく、横に並び、机の中央にワークシートを置き、二人が顔を近づけ合って話し合う場づくりをしたことで、話題が共通し、会話が活発になった。

１年生段階で、型のある学習手法を経験することで学びのパターンを知ることができ、安心してよりよくなるために主体的な学びへのつなぎが生まれるのではないだろうか。

ペアと話し込み、その考えを書くことに没頭していた子どもから出た「もっと時間がほしい。」という言葉は、発達段階にふさわしい学習活動であったことを示している。

○めあてを明確に示すことで、ふりかえりの価値が生まれた。

子どもたちが、この時間に何を学ぶのか、学んでどういう成果があったのかを実感するためには、単元を通して、また１時間ごとの学習活動のゴールを示し、学習の見通しをもつことが重要である。

そのため、単元の導入段階で、本実践では、子どもの特性をつかみ、「じどう車クイズ大会をする」ことを最終のゴールであることを伝え、これからの毎時間の学習が達成するための大切な時間であることを明確にした。従って、子どもたちはゴールに向かって、意欲的に学習に取り組んだと言える。

また、１時間ごとに学習活動のめあてを板書で示し、時間の最後にそのめあてにそったふりかえりを、当初は記号化や図式化など漠然とした自己評価から、徐々に文での表現に移行したことで、子どもたちの学びを「見える化」することにつながり、本時のふり返りにとどまらず、次時の学習へとつなげる原動力ともなり、最後までエネルギーを持続させることにもなった。

○学習の見通しを持つことによって安心して学習に参加できた。

単元を通して、一人読み、ペア学習、全体交流とほぼ同じ流れの活動を行うことで、今自分の考えが持ちにくかったり、自信がなかったりしても、隣の人の考えを聞いたり、相談したりできることがわかっていることで、安心して学習に取り組むことができた。特に、理解に時間を要する子どもにとって、「聞くことは恥ずかしくない。」「人の意見を真似てもいい。」などが認められている集団ではのびのびと学習に参加できる。

本単元でも、当初自分の考えが持ちにくかった子どもが、繰り返すうちに、たとえ一つでも自分の

考えを持てるようになる姿が見られた。

3. 本実践を今後につなげる

国語科の本質は、「言葉への感性を育てる」ことであると考える。ふさわしい言葉を選び、言葉の持つ意味を感じる力を育てる教科である。

今回は、１年生として、論理的な文章（説明文）を正しく読み取り、教材文に習って、論理的な文章を書く基礎をなる学習である。子どもたちは「じどう車クイズづくり」というめあてに向かい、楽しく読み、考え、進んで文章（クイズ）を書く姿、一人の学びから相手意識を持って関わり合い、学びを広げようとする姿が見られたことは大きな成果である。

しかし、前述したとおり、国語科学習としての位置づけを考えると、そのねらいを達成したととするには、さらなる考察、改善は必要である。

本実の成果を大きく評価しつつも、今後の国語科指導の充実に向け、２点について考察したい。

１つは、つなぎの言葉「そのために」への着目である。

本単元では、自動車の「しごと」につながる「つくり」を読み取り、その読みを生かして、考え、文章化することが求められる。キーワードとなるのは「そのために」という語である。

実際、授業の中で、子どもたちは自分が選んだ自動車の写真や絵を見ながら、意欲的に複数の文を考え、書き出した。ところが、勢いに乗るほどに、数を多く書きたいという思いが強くなり、「タイヤが４個あります。」「窓がついています。」「人が運転します。」などどの自動車にも共通する文が増えていった。

単なるクイズづくりであれば「たくさん考えたね。」「頑張ったね。」と褒めることで終わってもよいのであろうが、国語科としての学びを成立させるためには、最初に「しごとにつながるつくりを考える」ということをしっかり押さえておくか、または、書きためた文の中から、課題にふさわしい文を選択することが必要である。１年生の発達段階を考え、だれもが参加できる授業とするなら、まずは子どもの意欲を高め、多様に考える力の育成をめざして、広く許容し、その後、しごとにはつながらない文を見つけ、絞り込む方が賢明であるかと思う。

そうすることで、長文を正しく聞き取り、理解する力が未熟な１年生にとって、簡潔でわかりやすいクイズとなる上、つなぐ言葉を使った簡単な文章を書くことを学ぶ機会となる。この力が高学年に向けて、ただ長々と書きつなぐだけではなく、段落相互の関係や文章全体の構成の効果を考えて文章に書く能力を身に付けることに発揮されると考えるからである。

【参考】現行小学校学習指導要領国語における「Ｂ　書くこと」の各学年の目標

第３学年及び第４学年「１　目標」

⑵ 相手や目的に応じ、調べたことなどが伝わるように、段落相互の関係などに注意して文章を書く能力を身に付けさせるとともに、工夫しながら書こうとする態度を育てる。

第５学年及び第６学年「１　目標」

⑵ 目的や意図に応じ、考えたことなどを文章全体の構成の効果を考えて文章書く能力を身に付けさせるとともに、適切に書こうとする態度を育てる。

２つ目に、今回が後の学習にどのように生かされるかということである。

１年生の３学期２月に『これはなんでしょう』という４時間扱いの教材がある。この教材は、「ふたりでかんがえよう」という単元名の通り、二人で、身近なものの中から問題にするものを決め、必要な事柄を集め、話題に沿って話し合い、分からないことを尋ねたり、応答したり、二人で話し合って考えを一つにまとめることを目標に、「これはなんでしょうクイズ大会をする」ことをゴールとした学習である。本単元では、二人で考えを出し合って、一つにまとめるときにどのようなことが大切かに気づくことを目標としており、明らかに、今回の「じどう車くらべ」での取り組みを発展的に扱うことができる学習として位置づけられる。

つまり、学習の主体は個として、意見を得て、自分の文をよりよくした１２月段階のペア学習から、今回は、互いに意見を持ち、話し合いながら一つのものにまとめる共同の学習としてのペア学習であ

る。

この学習は、低学年ならではの教科である生活科において、一人で活動に没頭する段階から、仲間とともに活動する中で、意見を出し合い、時には衝突し合いながらも、最終的には折り合いをつけながら課題を解決していく力、つまり自立の基礎となる不可欠な力を育てる重要な機会であり、他教科においても同様の意味合いを持つ。

ところが、実際の授業の中では、「じどう車くらべ」と同じような学習展開になってしまっていた。前回の学習パターンやクイズ大会の楽しさを覚えている子どもたちの積極的な動きに、教師が安心し、本単元のねらいが薄れてしまったとも言える。

昨今、子どもたちの言語力、表現力の不足が課題とされる中、各学年および６年間の系統的な学習の積み上げを常に意識し、把握しながら指導内容を押さえ、実践することが重要である。

さらに、前回のつなぎの言葉「そのために」の学習を経て、聞き手がよりわかりやすい出題のために、いくつかのヒントを出す際、「一つ目に」「次に」「最後に」などの言葉が使えることにも気づかせてやりたい。そして、ヒントを出す順番など、どうすればよりよくなるかを考え込ませることで、順序立てて文章を構成する力にもつなぎたいと期待する。

６年間の論理的な文章を書くことに関する目標や内容のつながりを十分に考え、指導することなしに、子どもたちの表現力の育成は達成しえない。

終わりに

国語科指導において、教室に「ことばの文化」を築いていくことが重要であると考える。

学校現場では、おそらく個々の頭の中にはさまざまな思いや考えが渦巻いているはずなのだが、それをどう言語化していいのかわからない子ども、相手の言葉の意味を読み取れない子どもが多く見られる。ことばを生み出す力が不足することで、コミュニケーションがとれず、トラブルが生じ、それを解決できない事態が起こっている。

人の思いや考えは見ることができない。言葉として「見える化」することで、共感し、支援し、学び合うことができるのである。

主述のない文章や敬体・常体の使い分けのない会話、使い方を間違った言い回しなど日本語の乱れ、文章を正しくまた豊かに読み深める力、登場人物等に共感する感性、伝えたいことをわかりやすく書いたり話したりする表現力や要旨をまとめる力の低下などを見据え、小学校における国語科教育に課せられた責務を大きく捉える。

現行の学習指導要領において、２５時間という１年生の週時程のうち、３分の１強に当たる９時間が国語科に配分されているが、往々にして文字や漢字の習得にその多くを費やしていることも否めない。

国語科教育において習得する力は、全ての教科領域の根幹となり、学力向上に大きな影響をもたらすことは周知のことであろう。とりわけ、学びに期待を持ち、多くの知識や技能を習得したいと純粋に願う入門期の子どもたちの教室に、「ことばの文化」の基礎がしっかりと根付くことは極めて重要である。

入門期からの小学校における国語科指導のあり方について今後も研究を進めていきたい。